マレーシアとシンガポールにおける政治的腐敗（汚職）と経済発展の相関性について
-政治文化という媒介変数を通じて-

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2022-03-29
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 中川, 豪
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/22261

2021 年度　政治経済学研究科

博士学位請求論文　（要旨）

マレーシアとシンガポールにおける政治的腐敗（汚職）と経済発展の相関性について：政治文化という媒介変数を通じて

政治学専攻
中川　豪

1. 問題意識と目的

本論文は, 政治的腐敗（汚職）と経済発展の相関性についての研究である。これまでの先行研究, 特に新古典派経済学あるいは開発経済学において, 政治的腐敗（汚職）は経済発展を阻害する要因として考えられてきた。遡れば, 1997 年から 1998 年に発生したアジア通貨危機以降, 政治的腐敗を研究する経済学者は通貨危機の根本的な原因を, 権威主義体制下にある政府によるレント（利権）の独占, 「パトロンクライアント・ネットワーク」に求めてきた。

経済学者は政治的腐敗を根絶すれば経済発展を阻害する要因がなくなると考えたのである。これに基づく思考と行動は, 近年までの世界銀行の取り組みからも明らかである。世界銀行は過去十数年にわたって, 2030 年までに世界中から貧困をなくすことを目標に掲げ, 発展途上国で蔓延している政治的腐敗を根絶すれば、この目標を達成できると考えている。このため, いつしか, 貧困に陥る諸悪の根源が政治的腐敗にあるというレトリックが定着した。

しかしながら, 遡れば, 1970 年代以降に著しい経済発展を遂げたマレーシア, シンガポール, インドネシア, タイ, 台湾, 韓国等においては, 政治的腐敗がなかったわけではない。むしろ, あらゆるレントが政府に集約され, 政府が特定の組織・団体と結びつくような環境において, これらの国々は経済発展を遂げたのである。この意味で, 政治的腐敗が経済発展を阻害するという経済学者の仮説と理論は歴史的に実証されたものではない。すなわち、仮説と理論では、経済発展が，政治的腐敗以外の様々な要素によって左右される可能性を軽視していたのである。

そこで、本論文では, 政治的腐敗があるにもかかわらず経済発展を遂げたマレーシアとシンガポールを考察の対象とし、政治的腐敗があっても経済発展を阻害しないある種の政治文化が介在していたことを明らかにしたい。両国の経済発展とその成功体験は, 経済学者の仮説と理論が必ずしも妥当しないケースがあること，政治的腐敗と経済発展が両立する場合があることを示唆している。

2. 構成および各章の要約

その国の政治文化は, 政治的腐敗と経済発展の相関性を考える場合、重要な独立変数となる。そこで, 本論文の前半部分では, マレーシアとシンガポールの政治文化を考察の対象としている。まず, 第 1 章では, マレーシアの政治史と政治文化に焦点を当てる。

この章の冒頭では, 宗主国イギリスによる植民地期を経て, マレー系の王族・貴族階級出身者が政党を結党し, 政治的領域で台頭していく過程を分析している。この時期, イギリス植民地政府側は, あらゆる人種に平等な権利を与えることを主張していたが，マレー半島の多数派を構成するマレー系政治指導者はこの政策にあくまでも抵抗し，その結果, マレー人優遇政策に合法性と正当性が付与された。このことが，マレーシア政治史の大きな分岐点となったのである。

独立当初，ラーマン政権は，華人系・インド系マレーシア人の不満が表面化し政治体制が不安定化することを恐れ，マレー人優遇政策の実施に躊躇した。しかし，経済的に恵まれない立場にあったマレー人を

中心とするブミプトラは，華人系・インド系マレーシア人との経済格差が改善されないことに大きな不満を持ち，政治的領域で台頭しはじめた華人系レーシア人と衝突する（いわゆる「５月１３事件」）。この人種衝突は、数日間で死者 196 人、負傷者 439 人の犠牲者を出す大惨事となり、マレーシアを構成する各人種に大きな衝撃を与えた。これを契機に，マレーシア政府はマレー人優遇政策を本格的に実施していく。現在でもマレーシアの基本政策として存在する「ブミプトラ政策」（インフォーマルな政策であり、マレー人を中心とするマレーシアの先住民を政治・経済的に優遇する政策）は，この大事件が発生していなければ既にその正当性を失っていたかもしれない。

第１章の中盤では，ラーマン=ラザク体制の尽力によって形成された現代官僚制に焦点を当てていく。当時の政権（ラーマン政権とラザク政権）は，マレー人中心の官僚機構構築に尽力する。この努力がなければ，マハティールといえども，マレー人を優遇する各種の政策を確実に実施していくことは難しかったかもしれない。章の終盤では，権威主義体制が確立したマハティール政権期に政府が実施した民営化政策と救済政策が、ネポティズムに内在していた問題点を表面化させる要因になったことを分析する。ここで強調すべきは，マハティール政権期に深刻化したネポティズムの問題が，今日のマレーシア社会にも大きな影響を与えつづけていることである。また、ネポティズムが，マレーシアの経済発展と深く関連していることにも言及する。

第２章では，シンガポールの政治史と政治文化に焦点を当てている。章の冒頭では，独立前後のシンガポールの状況（イギリスから独立したマレーシア内の自治州）のなかの，若きリー・クワンユーの苦悩を描いている。つまり，マレーシアからの華人の自律を図ると同時に，いかに急速な経済発展を遂げるかという課題である。リーはこの状況のなかで，徹底したプラグマティズムに基づく政治哲学に目覚めていく。今日のシンガポールでは，リーの政治哲学に影響を受けた政権党（人民行動党）とその政治指導者によって，国民全体が超現実主義的な価値を持つ社会を形成してきた。これは若き日の政治家リーの苦悩と挫折の産物といえる。そして，この時期の経験が，シンガポール特有の政治文化を形成する根本的な要因となったといえよう。

章の序盤では，マレーシア時代のリーと彼の「盟友」達の挑戦と失敗，そしてシンガポールの転換期に着目している。マレー半島において，あらゆる人種が平等の権利を持つことを主張していた好戦的なリーは，マレー系政治指導者と対立し，この戦いに破れた。この時の敗北以降，人種の平等といった理想に訴えるのではなく，シンガポールを国家として存続させるためのあらゆる現実的な方策を追求するようになる。こうして，超現実的な政治指導者リーが誕生したのである。

章の中盤では，リーと彼の「盟友」達が国家存続の重要な資源として人的資本の育成に取り組み，優秀な人材が官僚機構に取り込まれていった過程を見ていく。章終盤では，政府の政策によって，特定の人種（華人系）が恩恵を受けるようになった政治的背景と，メリトクラシーがシンガポール社会に常態化し、経済格差を助長する一要因となったことを検証する。シンガポールでのメリトクラシーは，シンガポールの経済発展に大きく貢献した一方で，華人を中心とした閉じられた権力構造を生み出し，政治腐敗の温床になっている点を指摘している。

第３章では，第１章と第２章で考察したマレーシアとシンガポールの政治文化を重要な独立変数として，政治的腐敗と経済発展の相関性について考究している。まず，章の冒頭では，政治的腐敗とは一体何なのか，という一般的な疑問を出発点に，これまでの先行研究において，政治的腐敗がどのように定義されてきたのか，その歴史的変遷をたどっている。特に，それぞれの国の近代化の過程あり方が，現代における政治的腐敗のあり方に大きな影響を与えていることを認識する必要がある。

章の序盤では，政治的腐敗の存在が経済発展に常にネガティブな効果を与えるわけでないことを認識する必要性に言及している。経済学者は，公職者・官僚等の政治的腐敗は完全な悪として認識してきたが，これは普遍的に該当する議論であろうか。たとえば，アジア地域には，政治的腐敗が蔓延しているにもかかわらず急速な経済発展を遂げた国が数多く存在することはよく知られている。このため，政治的腐敗を頭から否定するのではなく，政治的腐敗がなぜ経済発展を阻害しない場合があるのか，その原因を特定化することが重要である，

章の中盤では, マレーシアとシンガポールにおいて, どのような政治的腐敗が蔓延しているのか, 構造的腐敗の観点から考察している。腐敗にはいくつかの型があり，決して一様ではない。このため, マレーシアとシンガポールでは，政治的腐敗の型はそれぞれ異なっている。ここではその型の詳細と, なぜ両国で該当する型の腐敗が蔓延したのか, その要因を解説していく。

章の終盤では, 政治文化と政治的腐敗の相関性と, 政治的腐敗がなぜ経済発展を阻害しない場合があるのか, その要因を主題としている。この部分では, 政治文化というインフォーマルな要素が, 政治的腐敗と経済発展の間の媒介的要因として機能していることに言及してみたい。

結論では, これまでの章の考察を総括し，これまで経済学者が軽視することが多かった各国の政治文化を政治的腐敗と経済発展の関係を考察する上での独立変数として捉え，政治的腐敗が存在しても経済発展を阻害しない状況から，政治的腐敗が経済発展を阻害するようになるまでの期間を 3 つのフェーズに分類し, マレーシアとシンガポールの実例をもとに検討をおこなっている。

以上